

神奈川

小田原駅東口の地下街「^{ハルネ}HaRuNe小田原」(以下、ハルネ)が、中心市街地活性化の期待を担って2014年11月にグランドオープンした。ハルネの延べ床面積は約8000平方メートル、売り場面積は約2000平方メートル。総事業費は約22億円、うち約4億円が国の補助金となっている(事業主体:小田原市)。

ハルネは、市内でつくられる蒲鉾を一堂に集めた「小田原かまぼこ本陣」、伝統工芸の実演を行う「TAKUMI館」など地元色の濃い店舗で差別化を図り、年間売上高17億円を目指す。小田原といえば蒲鉾、「小田原かまぼこ本陣」では、小田原蒲鉾協同組合員(13社)それぞれの自慢のかまぼこを楽しみながら比較・購入でき、また、「TAKUMI館」では地元につながる木象眼や箱根細工を扱い、製作実演も行っている。

「朝ドレファ〜ミ♪」は、JAかながわ西湘の大型農産物直売支所で、店頭には組合員がその日の朝に収穫した新鮮な野菜や果物が並ぶ。そして、地元の鮮魚店・魚國商店が手掛けるレストラン「海鮮横丁うおくに」では、地元の小田原漁港で水揚げされる魚介類を目利きのオーナーが仕入れ、定食として提供、観光客にも好評という。

観光客おもてなしの中心的な機能を果たすが、ハルネに設けられた「街かど案内所・小田原日和」と「ハルネ広場」だ。小田原日和にはスタッフが常駐、ホテルのコンシェルジュのように相談に応じ、地元の観光スポット、祭りやイベント、街なか情報などを発信している。また、ハルネ広場では、地場産品の即売や伝統工芸の実技指導、地元イベントのサテライト行事などが計画されている。

市は、小田原駅を利用する市民や観光客をハルネに呼び込むため、駅東口から直接出入りできるエスカレーターを新設、観光土産や地元の味を求める市民・観光客にとっては、駅ビル「ラスカ小田原」に加えて駅前回遊を楽しめることができるようになり好評だ。

ハルネの前身、地下街「アミーおだちか」は1976年、複数の企業が主体となって開業。しかし売り上



小田原伝統の木象眼の製作実演が行われているTAKUMI館(^{ハルネ}HaRuNe小田原)

地下街「^{ハルネ}HaRuNe小田原」 かまぼこや伝統工芸で差別化

げは伸びず、市や地元経済界が出資した運営会社が2003年に引き継いだものの改善には至らず、07年6月に営業を終了。前後して、小田原駅周辺では1990年代以降、百貨店「志澤」をはじめ「丸井」、「長崎屋」、「箱根登山ベルジュ」などの大型商業施設が相次いで閉鎖。

街の活気に危機感を覚えた市は、「地下街再生」を、芸術文化創造センター(市民ホール)整備、お城(小田原城)通り地区再開発と並ぶ、中心市街地活性化のための「3大案件」として取り組んできた(中心市街地活性化基本計画は13年3月内閣府認定)。新しい地下街の名称にも、市の意気込みが感じられる。ハルネには「植物の根のように、小田原の魅力を引き上げて市内中心部に人々が集まる、「小田原に『張る根』になってほしい」との思いを込めたという。

ハルネのオープン、地元経済に既に好影響を与えている。箱根登山鉄道が、小田原駅東口ロータリー前に商業施設の建設を発表(地下1階、地上4階、延べ床面積約2000平方メートルの商業ビルを計画)、ハルネとの相乗効果で駅周辺のにぎわい創出に寄与したいとしている(完成予定16年秋)。ハルネ効果が波状的に広がり、小田原市の中心市街地が昨年以上に賑わうことを期待したい。